

# 博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 16 号

2018（平成 30）年 4 月

聖心女子大学

## は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2018（平成30）年2月19日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

## 目 次

氏 名	松本 美耶 (まつもと みや) .....	11 頁
学位の種類	博士 (文学)	
学位記の番号	甲第 35 号	
学位授与年月日	2018 (平成 30) 年 2 月 19 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	『源氏物語』頭中将とその一族の《系譜》考	

氏 名	松本 美耶 (まつもと みや)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第 35 号
学位授与年月日	2018 (平成 30) 年 2 月 19 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	『源氏物語』頭中将とその一族の《系譜》考
論文審査委員	(主査) 名誉教授 原 岡 文 子 (本学非常勤講師) (副査) 教 授 深 沢 了 子 (副査) 教 授 佐々木 恵 介 (本学史学科)



# 博士学位論文の要旨

## I. 問題と目的

従来、『源氏物語』主人公である光源氏をめぐる物語については、一度は臣籍降下した皇子が父帝の妃との不義の恋によって准太上天皇の地位へとのおぼり、栄華を達成するという王権の論理をもって描かれていることが指摘されてきた<sup>注1</sup>。一方、光源氏生涯の好敵手だった頭中将とその一族の物語については、鈴木日出男氏が「しよせん王権を潜在させている源氏の体制下に組みこまれるしかなかった」<sup>注2</sup>と指摘するように、あくまで主人公光源氏の生を描くために、その時々において選択された設定が呼び込まれたに過ぎないものとして見なされてきたように思う。本論文は、「政治」と「結婚」・「恋」という二つの観点から改めて『源氏物語』頭中将とその一族の《系譜》について考察することにより、彼らの物語を貫く固有の論理の存在を明らかにすることを目的としたものである。

## II. 研究

上記の目的を果たすため、まず本論文の前半にあたる第一章、第二章では、「政治」という視点から頭中将一族の《系譜》を辿った。従来、頭中将とその一族の「政治」については、主に娘たちの後宮政策の失敗から勝者である光源氏に対する政治敗者としての面について論じられることが多く、頭中将の政治能力についてはさほど高い評価はなされてこなかった。しかし本論文では、史実や『うつほ物語』など他の物語世界における藤原氏との比較から、改めて『源氏物語』頭中将一族の政治家としての在り方を検討することによって、彼らが常に鋭敏な政治感覚をもって代々の帝に近侍し、光源氏や他の一族との政治闘争に挑む、非常に高い政治能力を有する一族であったことを実証することができた。

また、本論文の後半にあたる第三章から第五章では、頭中将一族の「結婚」・「恋」の《系譜》について、主に一族の皇女執着という点に着目し検討を行った。先にも顧みたように、従来光源氏の「恋」の問題については、高橋亨氏の「私的な〈恋〉が〈王権〉や政治とうらはらのテーマとして設定されている」<sup>注3</sup>という指摘のごとく、古代王権の論理に貫かれていることが早くから確認されてきた。一方、頭中将一族の「恋」や「結婚」の問題については、光源氏側の事情に沿ってあくまで無作為に選び取られたものとして考えられてきたため、勝者である源氏に相対する政治敗者としての一面に焦点が当てられるのみで、「恋」や「結婚」の問題が、彼ら一族の物語と一体どのように切り結ばれていたかについては、これまで十分に論じられる機会はなかったように思う。

しかし、本論文では頭中将とその一族の「結婚」・「恋」の《系譜》について、主に一族の皇女への憧憬という点に着目し改めて検討を行った結果、次のような論理が見えた。本来彼らは、藤原氏長者である左大臣と后腹内親王の大宮との異例の結婚によって誕生した、非常に高貴な藤原氏一族であった。にも拘わらず、光源氏の栄華達成の裏側で政治敗者となることによって、王族の血——皇女——への強い執着を、頭中将、柏木、そして薫といった一族の男子たちが、代々《系譜》として抱え込むことになったのである。このように本論文の後半では、頭中将とその一族の「結婚」・「恋」の物語にもやはり、政治敗者固有の心情、論理というものが存在してこいたことを明らかにした。

なお、各章の概要は以下の通りである。

**【第一章】『源氏物語』の「致仕」をめぐって**

第一章では左大臣とその子・若菜上卷太政大臣（もとの頭中将）の辞職——「致仕」——に着目し、本来七十歳以上の人物にのみ認められる「致仕」という恩典付きの辞職が、なぜ七十歳に満たない左大臣、太政大臣の親子二代にわたって認められているのかという点について、史実の検討を踏まえ論じた。彼らの「致仕」はいずれも史実における七十歳未満の「致仕」と同様に、先帝との親密な関係によって与えられた帝の特別待遇であり、左大臣一族が、賢臣として天皇家を支えるという政治的使命を担った、非常に重要な一族であったことが明らかになった。

**【第二章】『源氏物語』雲居雁の引き取りとその養育をめぐって**

第二章では、従来内大臣（もとの頭中将）の気まぐれと見なされてきた妾腹の娘・雲居雁の引き取りが、実際には政治的不遇を背負う内大臣の英断によってなされたものであったことを、雲居雁の義父・按察使大納言と内大臣の政治的対立から炙り出した。また本章では同時に、これまで見落とされてきた雲居雁の養育にかける祖母・大宮の熱意を、彼女の「心ことに」という教育方針から探った。そして内大臣家の人々にとって雲居雁が決して軽い存在ではなく、最初から歴とした一族の重要な《持ち駒》として扱われていたことを明らかにし、一族の周到な政治手法の一端を検証した。

**【第三章】『源氏物語』頭中将一族の結婚 —皇女とのかかわりから—**

第三章では左大臣一族の「結婚」について、特に皇女とのかかわりから検討を行った。皇室裁可によって后腹内親王が降嫁されるという左大臣と大宮の結婚については、史実や散文作品にはない異例のものであり、その異例と言うほかない高貴さを備える夫妻の在り方が婿である光源氏の強力な後見となっていたことが、これまでも先行研究において指摘されてきた。本章では改めて、後見のない一世源氏である光源氏の立場の脆弱さについて、史実における一世源氏の実態から確認し、この結婚が、主人公光源氏の栄華達成のために不可欠のものとして用意された結婚であったことを炙り出した。

また、このような大宮と左大臣の結婚は、自身の一族にも思わぬ形で影響をもたらすこととなる。本章の後半では、史実における藤原大臣家子息の結婚の実態を踏まえ、左大臣家の男子——頭中将、柏木——の結婚と皇女降嫁の問題について考察を行った。藤原氏同士の政治提携であるとされる頭中将と右大臣家・四の君の結婚については、これまで特に問題視されることはなかった。しかし本章では、史実における藤原大臣家子息の結婚の実態との比較から、この結婚が頭中将自身の出自には不釣合いで、不本意な結婚であったことを明らかにした。さらに柏木への女三の宮降嫁の問題については、史実における皇女降嫁の実態を改めて顧み、柏木への女三の宮降嫁がほぼ実現不可能なものであったことを確認した。そして、父・太政大臣（もとの頭中将）が最後までただ一人柏木への皇女降嫁へとこだわり続けた点について、彼自身の結婚への後悔を指摘した上で再検討し、これまでは表に出ることのなかった太政大臣自身の皇族の「血」への執着を指摘した。

従来、若菜上卷以降にあらわれる柏木への皇女降嫁、皇女執着の問題については、政治敗者となった太政大臣一族の政治政策の一環としてにわかに浮上したものであったと見なされてきた。しかし皇女の降嫁というテーマが、実は太政大臣一族の《系譜》のひとつとして、物語の始発から既に織り込まれていたことを、本章の検討によって明らかにするこ

とができた。

【第四章】『源氏物語』 柏木の女三の宮憧憬について — 「あて」の語をてがかりに—

第四章では柏木の女三の宮憧憬の淵源、具体的な相について、形容語の検討から考察を行った。従来、柏木の女三の宮執着については、彼女の「らうたし（らうたげ）」という美質に関わっての指摘が多かったが、本章では改めて柏木の視点から用いられる形容語を調査し、彼が、他者の持つ「あて」の美に強く惹かれる人物であったことを明らかにした。また光源氏と柏木それぞれの視点から女三の宮に用いられる形容語の比較から、柏木が、源氏からは見出されることのなかった女三の宮の「あて」の美をいちはやくとらえることによって、彼女にのめり込んでいったことを指摘した。

また本章の後半では、柏木の「あて」好みと、女三の宮と妻・落葉の宮に見出した「あて」の程度の差異や、柏木亡きあとの落葉の宮に対する夕霧との視点の相違からも伺えることを論じ、やはり柏木の女三の宮憧憬の淵源に「あて」の美が深く関わっていたことを結論付けた。

【第五章】『源氏物語』 薫の「あて」へのまなごしをめぐって — 父と子を繋ぐもの—

第五章では第四章における考察を踏まえ、柏木の息子である薫のまなごしから宇治の三姉妹（大君、中の君、浮舟）、また都の皇女たち（今上帝女一の宮、女二の宮）に用いられる形容語の検討を行った。まず宇治の三姉妹については、薫が最愛の人大君の面影を中の君、浮舟に求める時、そこにはやはり「あて」の美が重要な美質として見出されていたことを明らかにし、薫もまた父柏木と同様「あて」の美への強い執着をみせる人物であったことを指摘した。さらにその上で、薫から今上帝女一の宮、女二の宮に用いられる「あて」の用例を検討することによって、女三の宮ただ一人に固執した父柏木とは異なり、あくまで「あて」を手掛かりに様々な女君に惹かれていくという、薫の固有の在り方を検証した。

### Ⅲ. まとめ

本論文では、「政治」と「結婚」・「恋」という二つの視点から、『源氏物語』 頭中将一族の紡ぐ《系譜》について考察を行った。たしかに頭中将一族は、主人公光源氏の栄華達成のために敗者としてその裏側を生きた一族である。しかし一方で、勝者光源氏とも互角に戦いうる優れた政治家としての一族の姿も物語は描いていたということを、本論文の考察を通じて明らかにすることができた。また本論文では頭中将とその一族の「結婚」と「恋」の《系譜》について、主に皇女との関わりから検討した。その結果、彼らは左大臣と大宮の異例の結婚を契機に、王族の血への執着を代々《系譜》として抱え込む一族として描かれていることが浮かび上がった。このようにみると頭中将とその一族の物語とは、それ自体が政治敗者の物語としてある固有の論理をもって描かれることによって、光源氏の王権の物語を裏側から支えていたと言えよう。

#### 注

- 1 深沢三千男『源氏物語の形成』（桜楓社、一九七二年）、日向一雅『源氏物語の準拠と話型』（至文堂、一九九九年）等。
- 2 鈴木日出男「内大臣（頭中将）論」『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、一九八一年。



3 『色ごのみの文学と王権 源氏物語の世界へ』 新典社、一九九〇年。

## A Study of the “Lineage” of To No Chujo and His Clan in The Tale of Genji

### Abstract

Traditionally, it has been pointed out that the story of Hikaru Genji presents depictions related to the logic of the royal authority. On the other hand, as for the story of Hikaru Genji's rival, Tō no Chūjō and his family, it has been treated as a setting chosen only occasionally and invoked only to depict the life of Hikaru Genji, who is the main character. In this paper we once again traced the life of Tō no Chūjō and his family from the two perspectives of “politics” and “marriage and love” and inquired about the “genealogy” that runs through the family. Also, we have revealed that the story of their family also had its own logic and has supported the story of Mr. Genji.

First of all, in the first chapter and the second chapter we have inquired about the “genealogy” of the family of Tō no Chūjō from the viewpoint of “politics”. Traditionally, there have been many opportunities for discussion in regard of the politics conducted by Tō no Chūjō and his family from the side of them being political losers in contrast with the winner Hikaru Genji, and their political ability has not been highly evaluated. In this paper, however, by once again reviewing the aspects of Tō no Chūjō and his family as politicians in “The Tale of Genji” through comparison with the Fujiwara clan using historical facts and other stories it was proven that they were a family with very high political abilities.

Also, from chapter 3 to chapter 5, we have conducted an investigation with the main focus on the attachment of Tō no Chūjō and his family to imperial princesses from the point of view of the “genealogy” of “marriage and love”. As a result, the following logic has been observed. Originally, they were a very noble Fujiwara clan, born by an exceptional marriage between Sadaijin and Omiya. Nonetheless, by becoming political losers on the background of the glorious Hikaru Genji, the male children of the family such as Tō no Chūjō, Kashiwagi and Kaoru acquire a strong attachment to imperial princesses (=the imperial blood) in the sense of “genealogy”. As mentioned above, in the second half of this paper it was revealed that the inherent logic of political losers also exists in the “marriage and love” story of Tō no Chūjō and his family.

The outline of each chapter is as follows.

The first chapter focuses on “chiji” (= resignation) of the Sadaijin and Tō no Chūjō. Originally “chiji” was a special way of resigning which was only possible for people over the age of 70. In this chapter the reason why “chiji” was allowed over two generations to Sadaijin and Tō no Chūjō, who were under the age of seventy, was investigated based on consideration of historical facts. Both cases of their “chiji” can be said to have been examples of special treatment given because of an intimate relationship with the late emperor and they were the same procedures as those in historical facts on “chiji”

under the age of seventy. Through the discussion in this chapter it became clear that they were an important family who took charge of the political mission of supporting the Imperial Family as talented ministers.

In the second chapter it was demonstrated from the political conflict of Azechi-Dainagon (Kumoinokari's father-in-law) and Tō no Chūjō that accepting of Kumoinokari, who had been regarded as a capricious daughter of Tō no Chūjō, was a brave decision by Tō no Chūjō who had been actually facing political misfortunes. In addition, in this chapter the enthusiasm of grandmother Omiya who nurtured Kumoinokari was looked at from the point of view of her "exceptional" educational approach. Also, it was revealed that for the people of the Tō no Chūjō family Kumoinokari had never been of insignificant existence, and a part of the scrupulous political methods of the family was examined.

In the third chapter, the "marriage" theme in the family of Tō no Chūjō was examined specifically from the viewpoint of the relationship with imperial princesses. Traditionally, it has been pointed out that the unusual marriage between Sadaijin and Omiya was a strong protection for the son-in-law Hikaru Genji. In this chapter, from comparison with historical facts it was again confirmed regarding the weakness of the position of Hikaru Genji, who was the first generation Genji. Also, it was demonstrated that the marriage between Sadaijin and Omiya was indispensable for glorious achievements of Hikaru Genji.

In the second half of this chapter, the problem of marriages of Tō no Chūjō and Kashiwagi was examined. First of all, the marriage between Tō no Chūjō and Shinokimi was examined from comparison with historical facts and it was revealed that their marriage was unbalanced and unwanted for the blood-lines of Tō no Chūjō. In addition, by investigating the actual situation around the marriage of the imperial princess from historical facts, it was confirmed that the marriage of Onna Sannomiya to Kashiwagi was in fact almost impossible to realize. Further, it was once again considered about the fact that the father Tō no Chūjō would stick to the idea of marriage of his only son to the imperial princess all the way to the end while keeping in mind his regrets about his own marriage. Also, the traditional obsession of Tō no Chūjō himself with the imperial blood which had never appeared was pointed out.

Traditionally, the question of imperial marriage to Kashiwagi has been regarded as one that emerged as a part of policies of Tō no Chūjō who had become a political loser. However, through the examination in this chapter it was revealed that the theme of princess's marriage had already been incorporated from the beginning of the story as the topic of "genealogy" for Tō no Chūjō.

In the fourth chapter, adjectives used for others from the viewpoint of Kashiwagi, were investigated, and it was revealed that he was a person who was strongly attracted to the beauty of other people's "ate". Moreover, adjectives used for Onna Sannomiya from the perspective of both of Hikaru Genji and Kashiwagi were compared and it was

pointed out that Kashiwagi had deeply fallen into Onna Sannomiya by quickly grasping the beauty of her “ate”, which had never been discovered by Hikaru Genji. Also, in the second half of this chapter, the discussion went around the fact that Kashiwagi’s liking of “ate” can also be confirmed from the difference in the degree of “ate” found in Onna Sannomiya and his wife Ochibanomiya, as well as the from the difference with the viewpoint of Yugiri towards Ochibanomiya. Also, it was concluded that the beauty of “ate” was deeply related to the source of Kashiwagi’s longing for Onna Sannomiya.

In the fifth chapter, based on the inquiry of Chapter 4, adjectives used for the three sisters of Uji (Oikimi, Naka no kimi, Ukifune) as well as for the princesses (Onna Ichinomiya, Onna Ninnomiya) from the viewpoint of Kashiwagi’s son, Kaoru were investigated. First of all, regarding the three sisters of Uji, it was revealed that when Kaoru demanding the looks of his beloved Oikimi from his sisters Naka no kimi and Ukifune, the beauty of “ate” was found as an important beauty. Also, it was pointed out that Kaoru was also a person strongly drawn to the beauty of “ate” just as his father Kashiwagi. Furthermore, by examining the examples of “ate” used by Kaoru towards Onna Ichinomiya and Onna Ninomiya, it was highlighted that, unlike Kashiwagi who was only drawn to Onna Sannomiya, Kaoru’s peculiarity was that he was attracted to different women with the main point being the “ate”.

## 学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 松本 美耶

論文題目 『源氏物語』 頭中将とその一族の《系譜》考

審査委員 主査：原岡 文子（本学名誉教授 現非常勤講師）

副査：深沢 了子

副査：佐々木 恵介（本学史学科 専任教員）

### 1. 論文の要旨

『源氏物語』の主人公、光源氏の物語は、一旦臣籍降下した皇子が藤壺との密事により准太上天皇となるという王権の論理に貫かれるものとされる。他方、光源氏生涯の好敵手だった頭中将とその一族の物語は、これまでおおむねその光源氏体制下に組みこまれるものとしてしか顧みられることがなかった。本論文は、改めて「政治」と、「結婚」「恋」という二つの観点から、頭中将とその一族の生、系譜を辿り見、頭中将とその一族の物語もまた光源氏の物語の一方で、ある固有の論理を持ちつつ、主人公の物語を支える構造を持つことを検証するものである。

構成概略は以下の通りである。第一章、第二章は、「政治」の視点から頭中将一族の系譜を辿る。従来、頭中将とその一族の「政治」については、主に娘たちの後宮政策の失敗、つまり勝者光源氏に対する政治的敗者としての面を論じることが中心で、頭中将の政治能力については必ずしも高い評価が与えられてこなかった。本論文では、新たに史実や『うつほ物語』などの他の物語世界における藤原氏との比較を通して、改めて『源氏物語』頭中将一族の政治家としての在り方を検討し、実は彼らが常に鋭い政治感覚で帝に近侍し、光源氏や他の一族との政治的な戦いに挑む、優れて高い政治能力を持つ一族だったことを明らかにする。

さらに第三章～第五章は、頭中将一族の「結婚」「恋」の系譜について、主に一族の皇女への執着という点に着目し考察する。頭中将一族は、藤原氏長者である左大臣と后腹内親王の大宮との異例の結婚により誕生した、とりわけ高貴な藤原氏と位置づけられる。それにも拘わらず、光源氏の栄華達成の裏側で政治的敗者となることにより、王族の血、皇女への強い執着を、はからずも大きく抱え込むことになる。こうした敗者固有の心情、論理を、頭中将とその一族の「結婚」「恋」の物語に画定し得ることを、史実、そして「あて」などの語に注目することにより解明している。これらの五章に序と結が付されるのが、全体の構成である。

まず第一章は、本来七十歳以上の者にのみ認められる「致仕」という恩典付きの辞職が、左大臣、そして頭中将父子ともに七十歳未満で実現したことに着目、史実の詳細な調査から、帝による特別措置だったことを検証し、左大臣一族の政治的存在感を明確にした。さらに第二章では、一族の周到な政治手法について、これまで頭中将の気まぐれと見なされてきた妾腹の娘、雲居雁引き取りの事情から再検討する。史実の検証を踏まえつつ、往時不遇だった頭中将の、持ち駒雲居雁をめぐる継父按察使大納言の政治戦略阻止の意図を探り当てている。一章、二章ともに主として史実調査を軸に、一族の優れた政治的能力を実

証するものとして括られよう。

第三章は、頭中将、柏木、そして薫に至る一族の皇女への憧れ、降嫁願望を論じる。そうした皇女への執着を呼び起こしたものとして、后腹内親王を妻とする左大臣の結婚を始発と見定め、史実を顧みつつ一族の結婚の相、その心情を検証する。第四章は、柏木に焦点を当て、彼の女三の宮憧憬が具体的にどのようなものだったのかを、「あて」の語を手がかりに解明する。続く第五章では、柏木の子、薫もまた父同様「あて」に執着する姿を刻まれていることを明らかにし、父子の系譜、またその中での差異等を丁寧に検証した。四、五章は、とりわけ語に注目して論を展開した点に特色がある。

## 2. 本論文の評価

本論文について、第一に評価される点は、従来光源氏の物語に付随する役割に目が向けられ、おおむね敗者としての在り方に考察の中心が置かれていた頭中将をめぐる、その枠に止まらない位相を、「一族の系譜」という枠組みから改めて捉え直そうとした着眼の独創性と言えよう。後宮政策の失敗、といった観点を中心に論じられてきたこの一族は、けれども実は歴史資料に照らし見る時、豊かな政治性を備える一面を見せ始める。その考察の方法が、史実の着実な調査、検証に基づいていること、さらにその検証を物語の読みに反映させることにより、解釈に極めて客観的な実証性を備える点が、第二に大きく評価される点である。

第三には、語に着目する論の展開の周到さを挙げることができる。これは論者の研究方法の幅を示す結果ともなっていると同時に、丁寧な語の検証により一族の「皇女執着」という図式が、極めて説得的で明快なものとなったと言える。なお研究史の調査、論文構成等も行き届いたものとなっていることも高く評価されよう。

問題点としては、「第一章から三章までの論の展開と、語に的を絞る四・五章のそれとの間にやや違和感が残るように思われる」「包括的にその二つの関係を述べるものがほしい」また「史実を照らし見つつ、もう一度『源氏物語』本文の語るところをさらに詳細に顧みる必要があるのではないか」「説明不足な表現が残る点がある」等の指摘があったが、いずれもむしろ今後の課題とすべきであろう。新たな視座から頭中将一族の物語を読み解く論として博士学位に充分値する論文と評価できる。

## 3. 本論文の審査の過程

本論文は、2017（平成 29）年 10 月 30 日に提出された。同年 11 月 2 日学長より審査の付託がなされ、同年 11 月 14 日大学院委員会了承による 3 名から成る審査委員会が審査を開始した。2018（平成 30）年 1 月 24 日には、学位申請論文公開審査会および最終試験が実施された。なおこの日までに計 3 回の審査委員会を開き、慎重な審査を重ねている。

審査委員会では、「敗者」の枠から解き放たれた頭中将一族の捉え直し、という着眼の独創性ととも、研究史を踏まえつつ進められる、史実の堅実、周到な調査、「あて」等の語の検証等、客観的な実証性を豊かに備える検証過程が高く評価された。学位論文として、充分評価できることが確認されている。

博士学位論文  
内容の要旨および審査結果の要旨  
第16号

2018（平成30）年4月26日発行

発行 聖心女子大学大学院  
編集 聖心女子大学大学院  
〒150-8938  
東京都渋谷区広尾4-3-1  
電話 03-3407-5811（代表）